

福岡地方の地學的新事實

金尾宗平

既成地圖や従前の文献乃至は想像に基いて考へたり人に發表したり教えたりして居た事で、實地に調査して見て初めて其れが全然偽りであつた事を發見した場合位氣まづいやら愉快なやらの事はない、机上の空論は勿論假説に基いた機巧的な地理よりもつと／＼まだまだ我國では事實的材料の蒐集が必要だと思ふ事が屢々ある。詳報は後日に譲るとして差し當り最近發見した新事實の二、三を左に豫報して置き度きと思ふ。

(1) 相ノ島^ノの地質圖は間違。海ノ中道の北、筑前新宮の濱から海上入籽の處に浦島の龍宮城や桃太郎の鬼ヶ島にそつくりの傳説が残つて居る相ノ島^ノが在る(陸測圖五萬分一の津屋崎圖幅參照) 古來玄海唯一の避難港として萬葉集に迄謳はれた二百餘戸の漁村は島の西南端^{ヅカミ}地方に面し

た側にある、そこは一户二十人からの大家族制で亦有名である、此島(廣さ約六平方籽)がどうした事からか何れの地質圖(地質調査所の四十萬二十萬も縣單位の十萬のもの)を眺めても島の東端ほんの一部分丈を玄武岩として他は全く三紀層のものとしてある。然るに實際行つて見ると一から十迄悉く立派な玄武岩の島である事が解る。三紀に彩つてある北側の穴觀音のクリフ Cliff や西端の若い海蝕崖などは實に素人目にも鮮かなものである、メーサ(Mesa)になつて居る頂上の臺地は一面にバサルト(Basalt)の風化した赤黒い、鐵分の多い土質の開拓地である、地質圖を作つた人は恐らく此島へは渡つて居られないのではなからうかと迄疑ふ位である。

(2) 豊前の簗島は古生層。地質調査所の四十萬分一には花崗岩の色が施されて居るが、附近

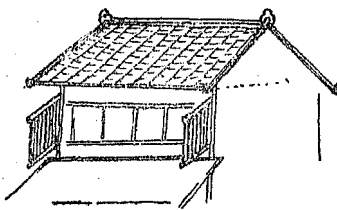
の島山には御影があつても此島は立派なシスト化した古生層からなつてゐる連繫島である事は確かである。

(3) 糸島の雷山附近の地質圖は反對。地質調査所の四十萬分一や縣の十萬分一も共に雷山の社寺ある聚落迄は悉く花崗岩とし其れから頂上迄を古生層に塗つてあるが事實は反對で、山麓高野の上から雷山の部落迄は古生層で、其處から殆んど頂上近く迄(九百米附近)は全くの花崗岩、僅か五六十米位の高さに頂上の部分丈が、モナードノット(Monadnock)となつて、急峻に残つて居るのである。

(4) 其他今津の毘沙門山が單なる古生層に非ずして之れを貫いて頂上に、玄武岩が巨大な柱狀節理をなして顯はれて居る事や、豊前平尾のカルスト臺地方面の石灰岩の分布が地質圖に示せるものよりも遙かに南北に廣く互れる事などは後日地質圖を添へて詳報したい。

(5) 海ノ中道の白濱にはバルハン(Barhan)型の砂丘群がある、芦屋の海岸でも之れに類する

ものを見た。又白濱の砂丘の中でいくつも立派な三稜石(Dred. kane)を拾つた、其の中二個丈は極めて典型的なものと思はれる。尙ほ此邊の砂が歌ひ砂(音樂砂)と云つて歩行する毎にキューキーと美音を發する事は「奈多(海ノ中道)に在り、陸測圖福岡近郷參照」の七不思議の中に「雀があるく砂が鳴く」とあるのを以つて見ても昔から地方の人にも解つて居たらしい、其他糸島の北崎や宗像の津屋崎等の海岸にもあるこれは「鹽分とも關係があるらしく海面と大潮際



限線との間に限られて美音を發する」と云ふ記録を見た事があるので行つて色々調べて見たが却つて海岸近くよりもずつと内部に這入つた所(大潮も達せない所)の方がよく鳴つて潮の満干區域は鳴らない事を経験した、遙か内部で砂の固まつ

てゐる地方の鳴らない事は無論である、これに就いてはもつと充分實驗する必要があると思つてゐる。

(6) 遠賀河口山鹿浦の舊家の特殊な建築風

京大藤田文學士に教つた大陸式建築風の退化遺存物たる「家の隔壁(メンマド?)」は當地方では始めて此浦の舊家に數軒見出した、此所は所謂山鹿庄の根元地で芦屋(芦屋千軒の歌で有名

な)の對岸に在り、一度日本書紀に其の名を出して爾來一千餘年幾多の歴史を残し古來繁昌の地であつた、随つて古風な大陸式の建築(堅固な白壁の土藏様の家が多い)や整然たる市街のある事も當然であらう。

以上それ〴〵寫真などもあるが今はほんのありし儘の事實を略報するに留めて置かう。

獨逸の地理學界 (三)

寺田貞次

七、フランクフルト・アム・マイン大學

ハイデルベルヒから、フランクフルト・アム・マインに向い、同地の大學を訪ねる。ハイデルベルヒと異り最近の建築にかゝり、石造の壯大な建物である。地理は自然科學中に設置されて居る、玄關の左側階段を登るとインスチチュートに達する。講義室を除き、約八室を備えて居

る。戸を排すと、短い廊下があり、突當りが主任教授の室である。主任の *Walter Behnmann* 教授丁度授業を終られた處であつたので、心よく面會して下した。御室はからりとした廣い室で、中央に大きな卓子を置き、演習は此處で催される様子であつた。次室に通ずる戸の側に机を備え周壁には書棚雜誌棚を充たして居た。